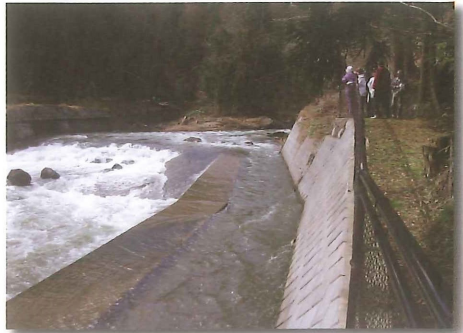


「芋川用水の歴史」

里山の景観が時を刻む

かつて、米一粒を得るための水は、水一滴血一滴といわれるほど大切にされ、水争いが非常に厳しかったようです。平安時代末期には芋川地区に「芋川荘」がありましたが、用水は斑尾川などの小河川を水源とした縦堰でした。現在見る事ができる芋川用水には、その後の長い歴史があります¹⁴⁾。

芋川用水は、慶長8年（1603）または天正8年（1580）に土木技術者の清水戸右衛門（現在の長野市篠ノ井にあった塩崎城の城主小笠原長詮の子）が開削しました。霊峰戸隠山を水源とする鳥居川の水を、信濃町戸草地籍にある取り入れ口から引き、芋川中村の大樋地籍までを通し、その距離は21.5キロにおよびます。巨岩、急傾斜地が続く上流部の工事は大



芋川用水の取り入れ口

変難儀を極め、多くの費用と人命を失ったと伝えます。その後、寛文の頃（1661～73）に飯山藩普請奉行の野田喜左衛門（現在の兵庫県姫路の出身で、飯山藩の新田開発者）により、大樋地籍から下流の毛野、東柏原地籍にまで延長され、流末を斑尾川に落とし、総延長29.5キロの横堰が完成しました。